

知覚・思考・判断・意志を表す 「文末名詞文」の使用実態

—コロケーションから文型へ

澤田浩子

◆要旨

文末名詞文は、日本語に特徴的な構文として言語学の領域で多く研究されているが、日本語教育での存在感は薄い。本稿では、「知覚・思考・判断・意志」を表す文末名詞文の使用実態を調査し、文末名詞文をコロケーションとして提示するのがよいのか、文型として提示するのがよいのか考察を行った。「感じ」「つもり」「予定」の3語はコロケーションとして抽出が可能であるが、その他の語彙は特出できるものは少なく、文型の中で範列的に機能する語彙リストとして提示することの有効性を提案した。さらに、使用頻度の観点とは別に、人称制限、ジャンル・文体の偏り、表現機能の差異に着目して、文末名詞文の習得の有効性と難易度について基礎的な観察を行った。

◆キーワード

文末名詞文、体言締め文、知覚・思考動詞、人称制限、範列的關係

◆ABSTRACT

This paper investigates the use of “noun-concluding sentences” that express perception, thought, judgment, and will, and assesses whether noun-concluding sentences should be taught as collocations or as a sentence pattern. From the results of corpus investigations, I demonstrate that the three words *kanji*, *tsumori*, and *yotei* appear frequently enough in noun-concluding sentences to be extracted as collocations. Other words, on the other hand, do not demonstrate such features as they occur more particularly in noun-concluding sentences, so it may be preferable for these words to be taught as a lexical list together with the sentence pattern. In addition, the validity and difficulty of acquisition of noun-concluding sentences are discussed from the viewpoint of grammatical person restrictions, deviation between genres, and expression functions.

◆KEY WORDS

noun-concluding construction, verbs of perception and thought, person restriction, paradigmatic relation

The Use of “Noun-Concluding Sentences” Expressing Perception, Thought, Judgment, and Will

HIROKO SAWADA

1 はじめに——日本語教育における「文末名詞文」の位置づけ

日本語には (1a, b) や (2a, b) のようなタイプの名詞述語文のほかに、(3a) (4a) のような「文末名詞文」と呼ばれる構文が存在する (新屋1989)。

- (1) a. 富士山は高い山です。 (『みんなの日本語』第8課)
b. 富士山は山です。
- (2) a. これはミラーさんが作ったケーキです。 (『みんなの日本語』第22課)
b. これはケーキです。
- (3) a. 私はずっと日本にすむつもりです。 (『みんなの日本語』第30課)
b. *私はつもりです。
- (4) a. 部長は支店へ行く予定です。 (『みんなの日本語』第30課)
b. *部長は予定です。

文末名詞文 (3a) (4a) は、名詞 (「つもり」「予定」) がコンピュータを伴って述部となる名詞述語文の形を取ってはいるが、(3b) (4b) が示すように連体修飾部 (「ずっと日本にすむ」「支店へ行く」) が必須であることから、(1a, b) (2a, b) のような名詞述語文とは異なる特殊な構文として扱われてきた (同様の構文を角田1996は「体言縮め文」、角田2011は「人魚構文」と呼ぶ。以下、本稿では「文末名詞文」とする)。

言語類型論的に見て、文末名詞文を持つ言語がアジア地域に偏ることが報告されているが (角田2011)、韓国語、中国語においても日本語ほど広範には成立しないことから (井上・金1998; 澤田2003, 2010; 井上2010)、文末名詞文は日本語に特徴的な構文であると言える。しかし、言語学や日本語学の領域で文末名詞文に関する研究が蓄積される一方で、その知見が日本語教育に十分に周知されているわけではない。(3a) (4a) に示した「～するつもりだ」「～する予定だ」がコロケーションとして初級で提示されているほかは、(5) のようなアスペクト表現、(6) のようなモダリティ表現が一部扱われているに過ぎない。

- (5) a. 今部屋をかたづけているところです。 (『みんなの日本語』第46課)

- b. たった今おきたところです。 (『みんなの日本語』第46課)
- (6) a. 彼は明日帰ってくるはずだ。
b. それで彼は急いで出て行ったわけだ。

2 問題提起

文末名詞文に関する研究の蓄積は、日本語教育には応用できないのだろうか。言語学的に見て日本語を特徴付ける重要な構文であるということが、必ずしも日本語の習得に有効な表現であるということに直結しないにせよ、一度その価値を日本語習得の観点から捉え直してみることは必要であろう。このような動機のもとに、本稿ではまず、①文末名詞文が実際のどの程度使用されているのかを調べ (第4節)、②文末名詞文をシラバスに導入する場合、文型として提示するのがよいのか、コロケーションとして提示するのがよいのかについて考察を行う (第5節)。その上で、③使用頻度の観点とは別に、文末名詞文の習得の有効性と難易点について基礎的な観察を行う (第6節)。

3 考察の対象と方法

第4節以降の分析に入る前に、本稿で対象とする文末名詞文の意味カテゴリーと語彙、調査に用いるコーパスについて述べる。

3.1 文末名詞文の表す意味カテゴリー

文末名詞文の表す意味カテゴリーは多岐にわたる。その分類は、新屋 (1989)、角田 (1996, 2011)、野田 (2006)、井島 (2010) によって試みられているが、ここでは新屋 (1989) の分類と文例、語例を示す (表1)。なお語例については、おおよその難易度を示すため、括弧内に日本語能力試験旧出題基準語彙の級を付し (表示のないものは出題範囲外)、級の低いものから配列しなおしてある。

表1 新屋（1989）における文末名詞文の意味分類と語彙リスト

A類：述部が、主語で表されたものを範列関係の中で位置づけるもの (例)「三千代の病気は今云う通り軽い方じゃない。」 クラス (4)、方 (ほう) (4)、タイプ (3)、種類 (2)、系統 (2)、パターン (2)、階層 (1)、類 (るい) (1)、たぐい、部類
B類：述部が、主語で表されたものの属性を述べるもの (例)「萩乃は女のくせに大きな乱暴な字を書く <u>たち</u> だった。」 形 (3)、匂い (3)、関係 (3)、性質 (2)、性格 (2)、立場 (2)、身分 (2)、出身 (2)、仲 (2)、構成 (2)、構造 (2)、形式 (2)、人柄 (1)、気質 (1)、体格 (1)、仕組み (1)、様式 (1)、体裁 (1)、趣 (1)、気性、性分、たち、体質、顔立ち、人相、運勢
C類：主語で表されたものや一定の状況の様態を感覚的に把握して述べるもの (例)「神谷直吉は返事に窮した <u>様子</u> だった。」 格好 (3)、空気 (3)、形 (3)、具合 (3)、感じ (2)、様子 (2)、気配 (2)、模様 (2)、状態 (2)、態度 (2)、表情 (2)、調子 (2)、勢い (2)、有様 (1)、風情、気色、素振り、言い方、口調、口振り、風 (ふう)
D類：述部が、主語で表されたものの主観を表すもの (例)「僕だってこのままでは兄さんに対してすまない <u>気持ち</u> です。」 意見 (3)、気持ち (3)、気分 (3)、つもり (3)、予定 (3)、感じ (2)、気 (2)、覚悟 (2)、考え (2)、決心 (2)、方針 (2)、主義 (2)、計算 (2)、印象 (2)、意向 (1)、認識 (1)、見方 (2)、解釈 (2)、判断 (2)、考え方、思い、心持、心境、魂胆、料簡、心組み
E類：状況をより詳しく述べたり、別の角度から解説を加えたりするもの (例)「取り急ぎ使いを以て右ご挨拶申し上げる <u>次第</u> であります。」 話 (4)、具合 (3)、わけ (3)、次第 (2)、理屈 (1)、始末 (1)、道理、顛末、塩梅
F類：主語で表されたものや状況の時間的または空間的な位置関係を述べるもの (例) 池は開花をはじめた <u>ところ</u> だった。 後 (あと) (4)、ところ (4)、近く (4)、そば (4)、隣 (4)、最中 (2)、途中 (2)、頃 (2)、直前 (2)、直後 (2)、近辺、時分、寸前
G類：話し手が他から得た情報として事象を伝達するもの (例) 太郎の父は大田絵具の社長で、母は後妻という <u>こと</u> だった。 話 (4)、こと (3)、噂 (2)、評判 (2)、由

このように、複数の意味カテゴリーにまたがって文末名詞文が存在していることは、日本語における名詞述語の選好性を示している点で興味深いですが、実際に教授の場面でこれらを一つの文型として提示することは現実的ではなく、そ

のメリットも薄いと考えられる。文型の使用頻度や有効性、また習得の難易度等を考える際にも、意味カテゴリー別に議論するのが妥当と思われる。

そこで本稿では、すでに初級の文法項目として定着している「つもり」「予定」を含むD類の語群を取り上げ、考察を行う。D類は概ね「～と感じる／思う／考える」などの知覚・思考・判断に関する表現、「～するつもりだ」などの意志に関する表現に対応する（野田2006の「②思考・感情の動詞相当 (a.思考、b.感情)」「④助動詞相当 (c.意志)」、井島2010の「認識用法」にほぼ相当する）。

3.2 分析対象語彙の選定

次に、本稿で分析対象とする語彙を定めておく。新屋（1989）は小説から広範に用例を採取し、多くの語彙を挙げているが、より網羅性を高めるため、以下の手順で分析対象とする語彙の選定を行った。

まず、『分類語彙表一増補改訂版一』を用いて、D類語彙が出現する意味カテゴリーを検索した結果、中分類「1.30人間活動一精神および行為：心」から9つの分類項目が該当した（表2左列）。次に、その9項目に含まれる語彙のうち、新屋の挙げる26語（表2中央列）のほかに、文法的に文末名詞文を取りうる26語を筆者の内省判断に基づいて抽出した（表2右列）。「心境」「心組み」「魂胆」「料簡（了見）」の4語は日本語能力試験旧出題基準範囲外の語彙であるため削除し、最終的に48語を本稿の分析対象とした。

表2 『分類語彙表』におけるD類語彙の分布と追加語彙

分類項目	新屋（1989）のD類語彙	追加語彙
1.3001 感覚	印象、感じ	感覚、実感、予感、感触、反応
1.3010 感情・気分	気持ち、心持ち、気分、心境	心情、心地
1.3045 意志	気、意向、心組み、魂胆	意思、意志
1.3061 思考・意見・疑い	思い、考え方、考え、意見、料簡（了見）、見方	感想、見解
1.3062 注意・認知・了解	認識、解釈	意識、了解、理解
1.3066 判断・推測・評価	判断、方針、計算	診断、判定、推理、推論、予想、予測、評価
1.3067 決心・解決・決定・迷い	決心、覚悟	決意、決断、結論
1.3075 説・論・主義	主義	説
1.3084 計画・案	予定、積もり	計画

ている (29.4+26.7+11.0=67.1%)。「つもり」「予定」は、第1節で言及したように、すでに現行の教材に採用されているが、この2語は使用頻度の点からいっても初級で取り上げる妥当性のある語であることが分かる。

次に、各語を基準にした場合に、それがどの程度の割合で文末名詞文として使用されているかを見てみる。表5左列〈全ジャンル〉に、各語がBCCWJに出現するすべての数を「総数」として示し、次に文末名詞文の「出現数」を挙げる。その上で、総数における文末名詞文の「割合」を算出し、割合の高いものから20語を示した。

表5 各語の総数における文末名詞文の割合 (上位20語)

	〈全ジャンル〉			〈新聞〉			〈知恵袋〉		
	総数 (件)	出現数 (件)	割合 (%)	総数 (件)	出現数 (件)	割合 (%)	総数 (件)	出現数 (件)	割合 (%)
1 つもり (2)	11,098	6,071	<u>54.7</u>	91	52	57.1	1,256	765	60.9
2 感じ (1)	20,145	6,684	<u>33.2</u>	71	26	36.6	4,804	1,755	36.5
3 予定 (3)	11,738	2,490	<u>21.2</u>	391	121	30.9	2,039	573	28.1
4 気分 (5)	8,365	977	11.7	71	5	7.0	908	93	10.2
5 心地 (35)	417	32	<u>7.7</u>	0	0	0.0	11	0	0.0
6 考え (7)	9,233	631	6.8	223	62	<u>27.8</u>	910	82	9.0
7 心持ち (39)	349	23	<u>6.6</u>	0	0	0.0	4	0	0.0
8 感触 (26)	1,126	73	<u>6.5</u>	12	1	8.3	42	4	9.5
9 思い (6)	12,204	766	6.3	254	10	3.9	884	23	2.6
10 印象 (9)	6,870	417	6.1	109	4	3.7	588	41	7.0
11 方針 (12)	5,374	284	5.3	437	87	<u>19.9</u>	142	9	6.3
12 予感 (27)	1,294	63	4.9	25	0	0.0	44	7	<u>15.9</u>
13 感想 (18)	2,420	110	4.5	46	3	6.5	322	12	3.7
14 気持ち (4)	23,335	1,044	4.5	207	8	3.9	4,378	122	2.8
15 感覚 (11)	6,795	300	4.4	73	1	1.4	564	34	6.0
16 覚悟 (20)	2,655	96	3.6	27	4	<u>14.8</u>	350	4	1.1
17 考え方 (13)	8,781	262	3.0	56	1	1.8	472	16	3.4
18 意向 (32)	1,408	39	2.8	103	13	<u>12.6</u>	49	0	0.0
19 決意 (28)	2,283	58	2.5	76	0	0.0	63	1	1.6
20 見解 (25)	3,038	77	2.5	51	1	2.0	85	3	3.5

表5は、各語の用法の習得という観点から、文末名詞文がどの程度重要であるかを示したものと見ることが出来る。「つもり」という名詞はBCCWJ中に11,098件出現するが、そのうち54.7%の6,071件が文末名詞文として出現しており、「つもり」という語の習得において「～するつもりだ」というコロケーションが重要であることを示す。「感じ」「つもり」「予定」は、単に出現数が多いだけでなく、文末名詞文の形で使用される割合も高いことが分かる。

また、各見出し語の右側に表示してある括弧内の数字は、表4における出現数順の順位である。「心地」「心持ち」「感触」の3語は、表4では順位が低く、全体の出現数は多くないが、それぞれの語の用法の中では文末名詞文が一定の割合 (6.5～7.7%) を占めていることが分かる。

さらに、表5中央列・右列は、〈全ジャンル〉と同様の方法でジャンル別に集計をしたものである。〈白書〉〈国会議事録〉は用例数が少なかったため、また〈書籍〉〈雑誌〉〈ブログ〉はさまざまな文体の記事が混在し、特徴を見るのが難しかったため、ここでは〈新聞〉と〈知恵袋〉の2つのジャンルに絞って表5に掲載する。例えば「考え」という語は、〈新聞〉の中で223件出現し、そのうち62件が文末名詞文として現れている。この割合は〈全ジャンル〉の6.8%と比べると格段に高く、「～する考えだ」というコロケーションは〈新聞〉というジャンルの特徴であると言えよう。同様に、「方針」「覚悟」「意向」の3語が〈新聞〉で、「予感」が〈知恵袋〉において、特に高い割合で文末名詞文として使用されている。なお、「つもり」「感じ」「予定」の上位3語は、〈新聞〉〈知恵袋〉どちらのジャンルでも高い割合で文末名詞文として使用されており、ここでは特にジャンルの偏向性を持たないことが窺える。

5 文型かコロケーションか

こうして表4、表5を見てみると、「感じ」「つもり」「予定」の3語が突出して使用頻度が高く、次にそれ以外の語が並行的に分布するという状況にあることが分かる。特に、「感じ」は「つもり」「予定」と同程度かそれ以上に文末名詞文との親和性が高く、少なくとも使用頻度の観点からすれば、コロケーションとして初級での提示が有効な語だと言えそうである。

しかし、その他の語について導入する場合、特定の表現をコロケーションとして特出することは難しい。一定の語群がまとまって並行的な使用頻度を示すのは、むしろこれらの語群が範列的（パラディグマティック）な対立の中で競合的に使用されることに意味があるためとも言える。したがって、この場合、文末名詞文を「[[内容補充節+ [名詞]] +コピュラ」という「文型」として学習し、[名詞]のスロットを入れ替えることで、生産的に文が作れることを習得する方が有効であると考えられる。

しかし、文末名詞文という「文型」がそれほど生産性の高い構文でないことは注意が必要である。(7)に挙げた「計画」と「企画」を例に見てみよう。

- (7) a. 県は、コンビニと連携して地産地消を促進しようと {計画/企画} している。
b. 県は、コンビニと連携して地産地消を促進する {計画/??企画} だ。
c. 県は、コンビニと連携して地産地消を促進する {計画/企画} を立てている。

(7a)が示すように「計画」と「企画」は類義関係にあり、どちらも漢語サ変動詞として用いられるが、(7b)の文末名詞文では「計画」が自然で、「企画」は不自然である。(7c)が示すように、「企画」という名詞自体は内容補充節を取るにも関わらず、それがコピュラを伴って述部となる時点で不自然となることが分かる。(7b, c)の差を説明するには、「内容補充」という概念を検討する必要があると思われるが、現段階において、どのような名詞が内容補充節を取り、文末名詞文の述部に生起できるのかを、非母語話者に明示的に示すのは難しい。

以上のことから、文末名詞文を「文型」として提示することは有効だが、その際には、範列的に機能しうる語群のリストを提示することが必要だと言える。

6 文末名詞文の有効性と難易度

ここまで、文末名詞文の使用実態を観察し、頻出語彙のリストを提示することで、文末名詞文を文型として提示することの有効性を述べた。次に、この節では、使用頻度とは別の観点から、文末名詞文習得の有効性と難易度について、基礎的な観察を3点に分けて行う。

6.1 人称制限

本稿で考察対象とした「知覚・思考・判断・意志」を表す文末名詞文は、感覚・感情形容詞、知覚・思考動詞、意志のモダリティなどと同様に、人称制限を持つ（新屋1989:78）。「寒い/寒そうだ」「思う/思っている」の対立など、人称制限に伴う表現の使い分けは、習得を困難にする要因の一つと考えられる。以下に表4、表5で取り上げた語群について、①1人称表現、②人称制限なし、③3人称表現に分類し、それぞれに用例を挙げる。

①1人称表現：「～と感じます/思います」類

【語群】感じ、気持ち、気分、思い、印象、感覚、感想、心地、心持ち、感触、予感

(8) {私/*彼} は、このままずっと日本に住んでいたいという [感じ/気持ち/気分/思い] です。

(9) {私/*彼} は、この街はとても治安がいいという [印象/感覚/感想] です。

②人称制限なし：「～と思っています/考えています」類

【語群】つもり、予定、考え、計画、方針、考え方、意見、見解、判断、認識、覚悟、決意、計算

(10) {私/彼} は、来年には帰国する [つもり/予定/考え/計画] です。

(11) {私/彼} は、少しでも危険性がある場合には渡航すべきでないという [方針/考え方/意見/見解/判断/認識] です。

(12) {私/彼} は、必ずこの仕事を成功させる [覚悟/決意] です。

③3人称表現: 「～ようだ/そうだ/らしい」類

【語群】 気、意向

(13) {私/彼} は、来年にも帰国する [気/意向] だ。

文末名詞文の習得に際し、語彙リストにはこれらの人称制限に関する情報が不可欠であり、それは一見、習得をより複雑で困難なものにしているように見える。しかし、中級以上の学習者にとって、「知覚・思考・判断・意志」に関する表現に人称制限が生じることは既習事項である。①1人称表現の語群は「～と感ずます/思います」類として、②人称制限なしの語群は「～と思っています/考えています」類として、③3人称表現の語群は「～ようだ/そうだ/らしい」類として、既習の表現に位置付けることで、語の範列的な体系性をより明確に理解することができ、使用語彙の拡大につながることも考えられる。

6.2 ジャンル・文体の偏り

文末名詞文は、表現によっては成立するジャンルや文体、発話主体の位相差に偏りが見られる(佐藤2004)。本稿で扱った語群の中でも、(14)のように日常の話し言葉で用いられそうなものから、(15)のように報告書や報道など、ある特定のジャンルを想起させるものもある。

(14) 桜はまだ2分から3分咲きと言うところで、晴天が続けばもう数日で見頃を迎える感じですね。
(Yahoo! ブログ)

(15) a. 我が国としては、NTTの外国企業の参入機会増大の努力について引き続き米国等の理解を深めていく考えであり、…(以下略) (通信白書)

b. トヨタはタイなどの現地法人を含めて約三億八千万円の義援金を送る方針だ。
(西日本新聞)

(15) の用例が示すジャンルの限定性は、「考え」「方針」という語が持つ特性に起因するものではない。(16a, b) の用例が示すように、それぞれの語の使

用自体は、ジャンルや文体、発話主体の位相をそれほど強く限定しない。

(16) a. 女性を好きになる一番のポイントってなんですか? 女の子は細いほうがいいという考えが自分の中にはあるんですが…。(Yahoo! 知恵袋)

b. 今朝スーパーに行ったら…(中略)…値段がこんなに違うのはなぜなのでしょう? スーパーの方針みたいなものですか? (Yahoo! 知恵袋)

あくまで、「～する考えた」「～する方針だ」という文末名詞文において見られる偏向性であると考えられる。このことは、第4節の表5で指摘したように、「考え」「方針」「覚悟」「意向」の4語が、特に〈新聞〉において文末名詞文で現れる頻度が高いという事実に対応している。

また、逆に話し言葉らしさに傾く語もあるようだ。ここで、文末名詞文のコピュラの形態に着目し、常体(「ダ」)、丁寧体(「デス」)、コピュラ省略形(「φ。」)の別に出現数とその割合を算出したものを表6に示す。

表6 コピュラ形態の出現割合(上位20語)

	合計 出現数	「ダ」		「デス」		「φ。」	
		出現数	%	出現数	%	出現数	%
1 つもり	6,071	4,887	80.5	1,103	18.2	81	1.3
2 感じ	6,684	2,713	40.6	2,997	44.8	974	14.6
3 予定	2,490	1,399	56.2	849	34.1	242	9.7
4 気分	977	649	66.4	230	23.5	98	10.0
5 心地	32	30	93.8	2	6.3	0	0.0
6 考え	631	491	77.8	106	16.8	34	5.4
7 心持ち	23	20	87.0	1	4.3	2	8.7
8 感触	73	35	47.9	4	5.5	34	46.6
9 思い	766	614	80.2	124	16.2	28	3.7
10 印象	417	200	48.0	121	29.0	96	23.0
11 方針	284	206	72.5	23	8.1	55	19.4
12 予感	63	10	15.9	14	22.2	39	61.9
13 感想	110	58	52.7	48	43.6	4	3.6
14 気持ち	1,044	758	72.6	217	20.8	69	6.6
15 感覚	300	187	62.3	70	23.3	43	14.3
16 覚悟	96	87	90.6	8	8.3	1	1.0
17 考え方	262	167	63.7	79	30.2	16	6.1
18 意向	39	35	89.7	2	5.1	2	5.1
19 決意	58	50	86.2	5	8.6	3	5.2
20 見解	77	62	80.5	14	18.2	1	1.3

3形態の中ではダ形が最も多いが、これはBCCWJが書き言葉コーパスであること、語彙素「だ」が他より多くの後続形式を伴うことに起因すると考えられる。その上で、各形態の割合を比較してみると、デス形との接続では「感じ」「予定」「感想」「考え方」の4語が多く、省略形「φ。」では「感触」「印象」「予感」の3語が特徴的である。〈知恵袋〉のような比較的、口語表現を反映したテキストや、〈新聞〉〈雑誌〉〈書籍〉に含まれるインタビュー記事などで、発話の直接引用のテキストがあることなどを考えると、デス形、省略形の割合が高いことが話し言葉らしさを反映していると見てよいだろう。

このように、それぞれの語が文末名詞文以外の環境で持つ文体差とは別に、文末名詞文としての文体差が存在し、それらを適切に使い分けることが要求される点では、難易度の高い表現であると言える。

6.3 表現機能の有効性

文末名詞文の多くは、より容易な表現に置き換えが可能である。第6.1節で示したように、「知覚・思考・判断・意志」を表す文末名詞文は、そのほとんどが初級項目の表現に集約することができる。また、新屋(1989)が指摘するように、文末名詞文の多くは何らかの機能動詞結合(村木1980)と対応する(「～する印象を受ける／～する印象だ」「～する思いがする／～する思いだ」など)。このようなことから、文末名詞文の持つ表現の有効性は小さく、学習者にとって習得の必要性はそれほど高くないという考えが成り立ちそうに思える。しかし、(17)(18)(19)のような用例を見ると、知覚・思考動詞と文末名詞文の用法は完全には一致しないことが分かる。

- (17)a. 私はこの問題の答えは「A」だと思います。
b. ??私はこの問題の答えは「A」だという思いです。
- (18)a. 友達が病気だと聞いて、できるだけ早く国に帰りたいと思います。
b. 友達が病気だと聞いて、できるだけ早く国に帰りたい思いです。
- (19)a. 日本食は身体にいいと感じます。
b. ??日本食は身体にいいという感じです。
b'. 日本食はほんとうにおいしくて、やはり身体にも美容にもいいとい

う感じです。

「～(という)思いだ」は「～と思う」と異なり、断定のモダリティと共起しない。したがって(17b)のように、問題に回答する場面では「～(という)思いだ」は不自然になり、(18b)のように願望を述べる場合は、「～(という)思いだ」を用いると実現可能性の低い事態として述べる含意が生じる。また(19)は、「～(という)感じだ」が「～と感じる」と比べ、より体感性の高い情報を要求することを示している。いずれも、知覚・思考動詞と文末名詞文とで共起する引用節のタイプが異なり、その結果、文全体の表現機能が異なる例である。

また、(20)のように発話態度の異なるものや、(21)のように場面や話者の位相差に関わる文末名詞文の使用も見られる。

- (20)a. 田中さんはいい人なのですが、この仕事は彼には難しいと思います。
b. 田中さんはいい人なのですが、この仕事は彼には難しいという印象です。
- (21)a. 今月中にはこの調査を終えるつもりです。
b. 今月中にはこの調査を終える方針です。

(20b)は(20a)と比べると、よりフォーマルである、あるいは強い主張を回避する発話態度であると感じる母語話者がいる。(21)についても、(21a)が個人の責任のもとでの発話と受け取られやすいのに対して、(21b)は、発話者が所属する組織・団体の責任のもとで発話しているという解釈が生じうる。第6.2節で言及したように、いくつかの語においては文末名詞文の使用がジャンルや発話者の属性を限定することがある。特定のジャンルに偏って現れる語彙を適切に使用することは、学習者が何者として日本語社会で行動するのかという選択肢の幅につながる。本稿ではこれ以上詳細な記述を行う余裕がないが、文末名詞文が、日本語習得のどの過程において、どの程度有効であるのかを論じるには、上述のような類似形式との比較が重要である。

7 まとめ

本稿は、「知覚・思考・判断・意志」を表す文末名詞文を取り上げ、BCCWJを用いて使用実態の調査を行った。その結果、「つもり」「予定」「感じ」の3語が突出して高頻度で使用されるほかは、ある一定の語群が大きな偏りなく並行的に分布していることが分かった。複数の語が範列的な対立の中で競合的に使用されることで意味をなしており、それらの語群をまとめて提示することで、文末名詞文という「文型」の習得がより有効になると考えられる。また、文末名詞文は、初級での既習表現「～と感じる／思う／考える」や「～つもりだ」と範列的な関係にあり、これらの既習事項と関連付けて語彙を増やすことで、ジャンルや文体、発話者の属性に応じた表現の使い分けに有効な、表現力の獲得につながると考える。

〈筑波大学〉

謝辞

本稿は、「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築 第6回研究会」(2013年2月23日国立国語研究所)、「日本語／日本語教育研究会 第5回研究大会」(2013年9月29日学習院女子大学)で行った口頭発表に加筆・修正を加えたものである。発表の席上で多くの方から有益なご意見をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

注

[注1] …… 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/、検索アプリケーション「中納言」<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>。

[注2] …… この検索方法では「これは、現在多くの国が支持する考えだ。」のような内の関係節を取る名詞述語文を排除できないが、全用例を手作業で確認することはしていない。本稿では出現数そのものを問題とせず、順位や出現の割合などおおよその分布を把握することが目的であるため、この検索方法でも十分であると判断したものである。

参考文献

- 井島正博 (2010) 「名詞述語文をつくる名詞節一形式名詞述語文の成立根拠を考える一」『日本語学』29(11), pp.48-57. 明治書院
- 井上優 (2010) 「体言締め文と「いい天気だ」構文」『日本語学』29(11), pp.58-67. 明治書院
- 井上優・金河守 (1998) 「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書—日本語と韓国語の場合—」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト平成10年度(II) 研究報告書』 pp.455-470.
- 佐藤琢三 (2004) 「「模様」の報告用法について」『国語学』55(4), pp.73-84. 国語学会
- 澤田浩子 (2003) 「属性叙述における名詞述語文」『日本語教育』116, pp.39-48. 日本語教育学会
- 澤田浩子 (2010) 「「彼は親切な性格だ」と「彼は性格が親切だ」—中国語から日本語を考える—」砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹(編著)『日本語教育研究への招待』 pp.251-271. くろしお出版
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』159, 左 pp.1-14. 国語学会
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103, pp.1-17. 国語学会
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作(編)『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』 pp.139-161. ひつじ書房
- 角田太作 (2011) 「人魚構文—日本語学から一般言語学への貢献—」『国立国語研究所論集』1, pp.53-75. 国立国語研究所
- 野田時寛 (2006) 「複文研究メモ(7) —文末名詞をめぐる—」『人文研紀要』56, pp.275-299. 中央大学人文科学研究会
- 村木新次郎 (1980) 「日本語の機能動詞表現をめぐる」『国立国語研究所報告 65 研究報告集2』 pp.17-75. 国立国語研究所

参考資料

- 国立国語研究所(編) (2004) 『分類語彙表—増補改訂版—』
- スリーエーネットワーク(編) (1998) 『みんなの日本語初級1・II 本冊』

